

一九九六年度

大学院文学研究科
中国研究科修士論文目錄
文学部卒業論文目錄
文学會賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文學會

一九九六年度大学院文学研究科
中国研究科修士論文目録

文学研究科

日本文化専攻

高橋 進 万葉集の「鳥」の歌について

石井裕之 『善光寺縁起』論

井戸幸一 日本古代における対外関係の推移について——遣日使節携帶圖書をめぐる周辺問題を中心として

加藤恵美 近代女性解放思想史の研究——奥むめおの職業婦人社を中心に

阮 毅 芥川龍之介と中国古典文学

竹沢直美 『獬犬集』研究

西村香織 中島敦『季陵』論——自意識についての考察

地域社会システム専攻

岩田康人 現代社会における水環境問題——愛知県油ヶ淵問題から見た水環境問題と人間との関係

欧米文学専攻

板橋亨子 非人称構文の研究——「ニーベルンゲンの歌」のテキストを資料として

鈴木哲夫 ヘーゲル哲学体系に於ける概念に就いて

林 美 茂 知らないことは学び得るか——プラトン哲学における想起説の原点をめぐって

中国研究科

中国研究専攻（文学会関係のみ）

- 陶 雪 迎 『紅樓夢』における年中行事
飯 田 直 美 王昭君故事の主題とその意義
福 手 美佐穂 唐代における交易港システムについて——交易と交易港
丸 田 純 子 『戴望舒詩論——詩集「私の記憶」を中心に』

一九九六年度文学部卒業論文目録

哲 学 科

東洋哲学専修

- | | | | | | |
|--------|---------|---------------------------|--------|---------|-------------------------|
| 九三P四〇〇 | 東 智美 | 不老長生について——葛洪『抱朴子 内篇』の研究—— | 九三P四〇二 | 堀 江 洋子 | 老子について |
| 九三P四〇三 | 奥 内 秀 貴 | 大同思想における孔子像 | 九三P四〇三 | 山 田 和 葉 | 「孫子」十三篇研究 |
| 九三P四〇三 | 岩 田 華代子 | 中国神話の発展と変遷 | 九三P四〇三 | 山 田 輝 俊 | 東洋思想と日本人 |
| 九三P四〇四 | 岡 崎 洋 史 | 孫子の平和 | 九三P四〇三 | 山 田 雅 世 | 墨子について——時代による捉えられ方の差異—— |
| 九三P四〇六 | 川 上 敬太郎 | 荀子の人間観とその影響 | 九三P四〇三 | 八 幡 雅 夫 | 易の変遷と日本人にとっての易 |
| 九三P四〇七 | 河 邊 智恵子 | 韓非子の思想 | 九三P四〇四 | 新 美 留美子 | 孔子について |
| 九三P四〇八 | 小 林 淳 志 | 陰陽五行説について | 九三P四〇〇 | 古 賀 章太郎 | 墨家の宗教思想とその展開 |
| 九三P四〇九 | 佐 々 直 紀 | 人間の運命について | 九三P四〇三 | 白 石 淳 一 | 中庸とは何か |
| 九三P四一一 | 柴 田 将 喜 | 「老子」の「道」 | 九三P四〇五 | 林 勝 利 | 「カースト制度について」 |
| 九三P四一二 | 下 村 美 樹 | 孔子について | 九三P四〇七 | 松 井 繁 | 観無量寿経に於ける當麻曼荼羅と善導 |
| 九三P四一三 | 新 海 隆 司 | 韓非子について | 九三P四一〇 | 宮 田 全 裕 | 老子の無為について |
| 九三P四一四 | 関 智 美 | 儒教の感性と道徳について | 西洋哲学専修 | | |
| 九三P四一五 | 関 野 克 明 | 荀子について | 九三P四一〇 | 浅 井 美 加 | サルトルにおける意識と想像力 |
| 九三P四一六 | 中津野 真 紀 | 中国仏教——その初期成立における思想—— | 九三P四一三 | 飯 見 直 樹 | ハイデガーにおける「本来的自己」について |
| 九三P四一七 | 永 谷 奈々弥 | 「莊子」の思想について | 九三P四一五 | 伊 藤 裕 子 | ベルグソンの宗教観 |

- 三P四二〇六 伊藤 ルリ子 キェルケゴールにおける「絶望の克服」について
 三P四二〇八 植村 耕一 自由と決定論——ベルグソンとスピノザ——
 三P四二〇九 大野 雅也 キェルケゴールの「絶望」について
 三P四二一〇 大場 雅文 カントの「悪」について
 三P四二二三 禿 昌浩 カントにおける「神」の問題について
 三P四二二三 城戸 亜紀子 パークリーにおける知覚と存在の関係について
 三P四二四 鈴木 貴雄 ニーチェにおける「ニヒリズム」について
 三P四二六 田中 聡美 パークリーにおける一般観念の問題
 三P四二七 寺尾 久子 パスカルにおけるキリスト教弁証論
 三P四二八 内藤 真史子 ベーコンの自然観について
 三P四二九 永縄 照子 サルトルにおける人間の実存と本質
 三P四三三 岡増 樹 ハイデガーの世界内存在について
 三P四三三 三浦 満美子 ハイデガーにおける「死」に

- 三P四三三 南 智子 デカルトにおける自然認識の問題
 三P四三五 渡邊 友康 ニーチェの永遠回帰について
 三P四三六 小林 みどり ハイデガーにおける「芸術」について
 三P四三七 近藤 祐加 プーバーにおける「我と汝」について
 三P四三八 宮林 かおり パークリーの「存在」について
 三P四三九 吉村 明美 ウイトゲンシュタインにおける「他者理解」について
 三P四四〇九 齋藤 洋子 ウイトゲンシュタインと「規則」の問題
- 社会学科
 社会学専修
 三S五〇一 穂丸 みずほ 民族の移動と多様化現象——その国際移動と多民族社会の出現——
 三S五〇二 足立 陽子 実力主義社会への道のり
 三S五〇四 石塚 浩 「私」の構成
 三S五〇五 上田 めぐみ 産業社会と学校教育
 三S五〇七 大竹 幹宏 学歴社会の病理

九三S五〇八 嘉田 則裕 現代社会とコミュニケーション

——アメリカ企業との比較的検討——

九三S五〇九 加藤 将司 現代社会と青少年犯罪に関する一考察

九三S五二〇 川合 妙子 日本人と宗教——ライフコースの視点から——

九三S五二一 菅野 千絵 情報社会とマルチメディア

九三S五二三 木庭 慶信 マルチメディアの将来性とその問題点についての若干の考察

九三S五二四 佐藤 弘樹 落語に関する社会学的考察

九三S五二五 佐藤 豊樹 環境問題と国際社会

九三S五二六 時々輪 春香 「戦争証言」と「記憶」——映画「シヨアー」における「ホロコースト」の証言可能性について——

九三S五三三 平井 大 環境問題と社会

九三S五三二 服藤 幸則 現代社会における遊びの社会性

九三S五三三 舟橋 俊克 高度情報時代と社会

九三S五三四 牧園 英樹 現代人の孤独と不安——人なぜ自殺するののか——

九三S五三五 松尾 竜二 ゴッフマンの自己呈示についての研究

九三S五三六 三木 浩二 情報化社会の文化記号論的考察

九三S五二八 鈴木 強 学校教育における主体的人間の育成について

九三S五二〇 都築 正仁 広告と購買行動——広告効果に関する一考察——

九三S五二二 寺倉 浩一 今日の若者文化における都市生活様式の展望

九三S五二三 富田 真由子 日本における企業の社会貢献

九三S五〇四 中黒 司 余暇社会における労働と教育

九三S五〇五 中村 純子 現代家族と親子関係——母親の就業による家族への影響——

九三S五〇六 中村 吉孝 日本の自動車産業における雇用制度の変化について

九三S五〇七 鍋田 卓志 学校におけるいじめの構造について

九三S五〇九 二村 栄男 社会的逸脱行為——非行についての考察——

九三S五三〇 原田 渡 七〇年代若者社会におけるモラトリアム現象についての考察

九三S五三三 服藤 幸則 現代社会における遊びの社会性

九三S五三三 舟橋 俊克 高度情報時代と社会

九三S五三四 牧園 英樹 現代人の孤独と不安——人なぜ自殺するののか——

九三S五三五 松尾 竜二 ゴッフマンの自己呈示についての研究

察

応用社会学専修

- 三三S五〇七 村上香織 労働者の自己実現可能性の諸条件に関する社会学的考察
 三三S五〇六 縦山真司 ネットワーク社会とコンピュータ犯罪に関する一考察
 三三S五〇五 門名香 公共性と共同性——住みよい街づくりへの課題——
 三三S五〇四 山内麻里 環境にやさしい態度と消費行動との社会的ジレンマ
 三三S五〇三 伊東綾子 近代家族における女性の性役割についての考察
 三三S五〇二 伊藤彩子 ジェンダーの文化的再生産
 三三S五〇一 加藤公代 文化変容論の研究——アメリカカ先住民の事例——
 三三S五〇〇 加藤智子 家庭のしつけと教育力の低下に関する考察
 三三S四九六 杉野由美 高齢者介護と地域社会づくり
 三三S四九七 鈴木雅恵 風俗における結婚
 三三S四九八 高橋小直 女性の自立について
 三三S五〇七 乘山大輔 自己表現活動の内発的動機についての考察
 三三S五〇七 村松健 日本人の責任感
- 三三S五〇一 青山祐子 ベストセラーの構造と社会的世相
 三三S五〇二 天木香苗 過疎集落におけるキャリア選択の葛藤要因・心理的「枷」の存在——奥三河・北設楽郡東栄町の場合——
 三三S五〇三 安藤加代子 アメリカと日本のポランティア活動における比較研究
 三三S五〇四 伊神尚子 購買行動における消費者心理——ヒット商品の魅力——
 三三S五〇五 石河薫子 職場における快適性実現のための環境デザインの実践効果——色彩調節と音楽の効用をめぐって——
 三三S五〇六 石川さき子 青少年犯罪と犯罪形成空間としての家族との関連
 三三S五〇七 石川純子 「高齢者社会の到来と在宅福祉問題について」
 三三S五〇八 岩室浩司 現代社会における余暇のあり方について
 三三S五〇九 上田利恵 個の尊重と社会——教育の可能性——

九三S五二〇 海老原 巨樹 「権利としての労働」と精神

薄弱者

九三S五二一 大崎 桃子 「非法律婚」という生き方に

関する考察

九三S五二二 大須賀 恵 ホスピスにおけるソーシヤル

サポート研究——死を受容する人間関係——

家族機能の変容

九三S五二三 小野 和 幸 「家族生活の意義」——現代

社会における家族関係の在り方——

九三S五二四 金澤 志朗 職場のストレスとメンタルヘ

ルス

九三S五二五 加茂 瑞穂 だいたいなものぐゆらいでる

——常識破壊と若者——

九三S五二六 河合 一 寛 現代社会と少子化問題につい

て

九三S五二七 河方 真理子 子どもの社会化と自己形成

——

九三S五二八 北 出 徹 哉 ホワイトカラーにおける働く

ことの意味

九三S五二九 鬼頭 暁子 高度情報化社会におけるリア

リティの変容について

九三S五三〇 久納 契 わが国における都市化とその

影響

九三S五二五 坂本 泰 紀 近代スポーツ・サッカー——

その魅力とビジネス——

九三S五二六 志水 暁子 機能不全家庭における子供に

対する心理的影響と回復への

決定要因——アダルト・チル

ドレンの成長を阻むものは何

か——

九三S五二七 杉浦 賢 クルマ文化の象徴性にみる比

較文化論的考察

九三S五二八 杉本 憲一 いじめにおける子供社会の問

題

九三S五二九 鈴木 猛久 「高齢化社会における社会福

祉」

九三S五三〇 高橋 徹 高齢化社会における地域福祉

政策

九三S五三一 田中 紀子 現代家族と高齢者問題

——

九三S五三二 丹下 清明 「高齢者福祉の現状と課題」

社会精神医学——個人と家族

の問題を中心にして——

九三S五三三 寺西 毅 学歴社会の崩壊に伴う資格社

会の実態——販売士制度の現

状——

- 九三S五三六 富田 勉 廃棄物がもたらす被害と対策
 九三S五三七 内藤 博 晃 生活の場としての都市づくり
 — 地方中核都市を中心に —
 九三S五三八 中井 順子 家庭教育の変遷と現代の課題
 九三S五四〇 新實 康朗 現代「いじめ」考
 九三S五四一 野田 浩志 非行発生過程における社会環
 境の考察——家族と学校を中
 心にして——
 九三S五四三 橋本 博昭 「成熟社会における『豊かさ』
 とは」
 九三S五四四 長谷川 友紀 中流意識を通してみる日本人
 の「豊かさ」感
 九三S五四五 平井 美穂 人間社会と非行問題
 九三S五四六 平井 陽子 出産の社会的意味——産みた
 い人が産める社会をめざし
 て——
 九三S五四七 深谷 恵美 看護婦のパーソナリティと終
 末期看護における回避行動と
 の関連
 九三S五四八 福井 康子 犯罪行為と行為者の人間関係
 との関連性
 九三S五四九 古澤 高志 生活型環境破壊の構造と環境
 の保全に向けた取り組み——
 九三S五五〇 星野 冬樹 生活者を中心に——
 消費社会と流行現象——「女
 子高生」ブランドを通して——
 九三S五五一 牧 修史 情報操作
 九三S五五二 牧野 俊樹 「知的障害者の自立とノーマ
 ライゼーション」
 九三S五五三 増田 和人 企業・マスコミによるスポー
 ツの商品化について考える
 「競争」から考えるスポー
 ツの近代化の構造
 九三S五五四 増田 剛 三遠南信広域地域圏の構想と
 問題
 九三S五五五 松岡 日出生 こどもの社会化——道徳性の
 発達とつけ——
 九三S五五六 松田 由布子 現代社会における女性と婚姻
 —なぜ結婚か—
 九三S五五七 村松 久美子 組織の成長——その転機と人
 間関係——
 九三S五五八 森 奈津美 大衆心理と大衆操作
 九三S五五九 八木 栄 青年期における勢力の層層構
 造の現状——支配の必要性を
 持つ者の心理——
 九三S五六〇 山内 浩司 日本社会における性のあり方

九三S五二六 山本 ちさと 現代家族と親子関係

九三S五二五 宋 志勲 韓国社会の政治不正（政治資金の収支を中心に）

九三S五二四 伊藤 まり 在日外国人の労働問題

九三S五二三 西塚 るみ 自殺に関する社会学的一考察

九三S五二二 酒井 淳司 自殺に関する社会学的一考察

九三S五二一 宮崎 文登 日本の学校教育と教育のあるべき姿（集団教育を中心として）

九三S五二〇 山崎 真理子 食糧管理制度の行き詰まりと米の輸入自由化

九三S五一九 山崎 真理子 言語表現と差別——「差別はいけない」イデオロギーに打ち勝つための考察——

九三S五一八 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一七 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一六 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一五 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一四 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一三 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一二 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

九三S五一〇 長谷川 真司 多文化主義の課題と可能性——カナダの事例を中心に——

史 学 科

日本史専修

九三H六〇二 青木 智子 太政官成立に関する一考察

九三H六〇一 青山 真弓 応永の外寇後の日朝関係につ

九三H六〇四 江塚 訓子 日野富子の権力について

九三H六〇三 大村 愛 藤原実資の家族をめぐる

九三H六〇二 岡田 世津 霜月騒動について

九三H六〇一 春日 綾子 八世紀後半の政治過程

九三H六〇〇 加藤 明日香 古代の喪葬に関する一考察

九三H五九九 神谷 亜由子 南蛮外科 栗崎流について

九三H五六二 近藤 久乃 鎌倉初期の朝幕関係について——建久年間を中心として——

九三H五六〇 齋藤 聡子 按察使制度について

九三H五五九 齋藤 静絵 近藤家と洋々医館について

九三H五五八 柴田 陽一郎 桓武朝における国司交替制度の監査について

九三H五五七 杉本 広美 東海道島田宿と大井川越し

九三H五五六 高橋 賢 讃岐国長尾荘に関する基礎的研究

九三H五五五 竹内 紋子 両統迭立について——伏見天皇と関東申次の関係——

九三H五五四 武知 美由紀 御台所について

九三H五五三 常川 弘 奈良時代の遣唐使

九三H五五二 徳永 優子 横井千秋と国学

九三H五五一 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

九三H五五〇 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

九三H五四九 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

九三H五四八 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

九三H五四七 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

九三H五四六 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

九三H五四五 中島 愛 近世末期神宮寺に関する一考察

三三六〇五 中村 幸子 古代の牧

三三六〇七 早川 誠 能の発展と足利將軍

三三六〇六 日比野 幸子 桑名・柏崎日記について——桑名藩下級武士の生活についての一考察

三三六〇四 金子 富士子 中世における身分制について——非人を中心として——

三三六〇五 中村 千佳子 三河吉田藩の国学者 鈴木深満について

三三六〇三 堀田 健吾 藤原京に関する研究

三三六〇三 横田 健吾 日本古代の音楽制度について

三三六〇三 牧原 昇司 奈良時代の国司監察制度

三三六〇三 柵木 智子 古代の東北と律令国家

三三六〇五 水野 孝彦 中世の東海道——東海地方を中心として——

三三六〇六 三井 貴雄 古代の東国軍制——群盜と馬——

東洋史專修

三三六〇七 宮崎 公成 觀察使に関する研究

三三六〇六 宮地 靖 渡辺政香に関する一考察

三三六〇六 山崎 貴子 石川依平とその門人

三三六〇四 横山 和弘 鎌倉期後国大田荘における莊園領主高野山の莊支配構造について——預所の分析及び大田荘支配に関わる寺院構造についての分析——

三三六〇二 朝倉 正裕 嘉慶白蓮教の反乱について

三三六〇三 浅野 保敬 唐代の私兵について——藩帥と官健の対立の視点から——

三三六〇六 伊藤 しのぶ 一九二〇年代後半の朝鮮における女性運動——權友会を中心にして——

三三六〇四 和久田 晴康 遣唐使廃止に関する一考察

三三六〇四 植村 浩子 三河歌人 岩上登波子について

三三六〇八 鍵谷 亮太郎 戴名世「南山集」事件について

て

鎌倉幕府に於ける執權政治から得宗專制への移行

純祖期朝鮮における暗行御史制度について

唐代の私兵について——藩帥と官健の対立の視点から——

一九二〇年代後半の朝鮮における女性運動——權友会を中心にして——

〓日六二〇 加藤 優子 明代福建民衆についての一考察——主に徳化黨について——

〓日六二一 壁谷 千江美 明代宦官について

〓日六二四 後藤 大輔 甲申政変について

〓日六二六 櫻井 大介 アユタヤ王室と外国人居留民

〓日六二七 佐藤 今日子 日本統治下における朝鮮の地主制について

〓日六二八 澤田 崇 十七世紀末、イギリス東インド会社とインド社会

〓日六三三 野澤 あゆみ 人民行動党とシンガポールの独立

〓日六三二 山本 久美子 太平天国の女性問題について

〓日六二九 西村 博和 宋代文治主義移行期の武人処世術——宋初の武將 曹彬を中心として——

〓日六二二 梶川 克哉 漢武帝期の政治と音楽の関連性について

〓日六二六 橘 秀夫 韓人の渡日の背景について

〓日六二六 渡邊 卓哉 ビルマにおけるタキン党とインド人排斥

地理学専修

〓日六〇二 足立 賢一 土岐川最上流部における無機態窒素の起源について

〓日六二二 石津谷 良広 浜松地区における交通事故發生の地理学的研究

〓日六二四 金森 智香 長良川下流域における冬季水田高畦の研究

〓日六〇六 菅田 康元 愛知県における都市機能と廃棄物

〓日六〇七 土戸 直樹 現代における、豊川稲荷に対しての地元住民意識

〓日六〇八 道家 慶子 地下鉄東山線の駅周辺における建物の業種別利用状況

〓日六〇九 原 圭吾 一宮市における土地利用の進展

〓日六二〇 藤井 達弘 西宮市における酒造業の阪神大震災に伴う被害と復旧について

〓日六二二 古澤 優子 日進市における宅地化の特性について

〓日六二四 山崎 晃 西尾市における抹茶生産業の地理学的考察

〓日六二五 吉原 正佳 PHS事業の成立について

〓日六二六 田所 人志 昭和九年の庄川の洪水・被害・復興に関する研究

〓日六二七 福留 一朗 鹿児島県の各都市内部にお

る地区別人口構造

五二六三〇 小林 卓也 伊豆半島における住民の行動

空間——医療圏を中心に——

五二六三三 鈴木 浩二 下野平野におけるユウガオ栽培

培についての研究

五二六三四 小橋川 原 豊橋市における美容店の立地

配置について

文学科

国文学専修

五二七〇二 出雲 千晴 萬葉集における大伯皇女の歌

について——人称代名詞を中心

心に——

五二七〇三 市野 勝久 『天狗の内裏』研究

五二七〇四 伊藤 英利子 『今昔物語』研究——蛇を中心

に——

五二七〇五 大草 真美子 遠藤周作『沈黙』作品論

五二七〇六 大河内 俊雅 伊勢物語の研究

五二七〇八 大庭 千代子 村上春樹『国境の南、太陽の

西』論

五二七〇九 小川 哲史 三島由紀夫『金閣寺』論

五二七一一〇 小野木 里奈 古事記の訓読について——

「鳴」「泣」「哭」「啼」における

意味の使い分け——

五二七一一 小畑 広幸 神話のなかの女性神——古事

記 神代巻を中心に——

五二七一二 神谷 史 『立烏帽子』研究

五二七一四 川瀬 雅子 梶井基次郎論

五二七一五 木村 明美 井上靖『あすなろ物語』論

五二七一六 工藤 みゆき 芥川龍之介研究

五二七一七 小出 亮二 三島由紀夫『仮面の告白』論

五二七一八 小島 薫 谷崎潤一郎『春琴抄』研究

五二七一九 小林 立樹 江戸川乱歩研究

五二七二〇 小林 千佐子 『吾吟我集』の研究——石田

未得『笑い』の技巧——

五二七二二 清水 綾子 源氏物語における「おほつか

なし」と「心もとなし」につ

いて

五二七二三 下村 恵子 狐の怪婚譚について——賀陽

良藤説話を中心に——

五二七二三 杉原 愛 源氏物語『末摘花の研究』

五二七二四 鈴木 野倫子 『貫之集』研究

五二七二五 清家 浩貴 阿刀田高『ナポレオン狂』と

ブラックユーモア

五二七二六 竹田 京子 有島武郎『或る女』研究

五二七二七 恒川 幸子 『灯台鬼説話』の研究

九七〇六 中村 由美子 『しくれ』の研究

九七〇五 長井 真由美 『諏訪の本地』の研究

九七〇四 成田 政之 『旅人かへらず』論

九七〇三 西田 綾子 源氏物語における「ゆゑ」と「よし」の考察

九七〇二 芳賀 稔子 中古語における「なやむ(し)」と「わづらふ(し)」について——源氏物語を中心に——

九七〇一 濱口 順一 『漢屑物語』研究

九七〇〇 平松 史代 『源氏物語』における「うとまし」と「むくつけし」について

九六九九 松葉 漸 正彦 太宰治「罪」について

九六九八 森 直江 宮沢賢治「グスコープドリ」の伝記論

九六九七 山住 明 『徒然草』の美意識

九六九六 李 垠炯 太宰治「斜陽」論

九六九五 川合 瑞穂 『日本永代蔵』研究

九六九四 服部 一江 『源氏物語』における加持・祈禱の研究

九六九三 武藤 彩加 源氏物語の擬音語・擬態語について

九六九二 占部 裕美 三島由紀夫『金閣寺』研究

九七〇六 坂本 良裕 正宗白鳥『玉突屋』の研究

九七〇五 宮田 興 一致の研究——自然主義文学における言文

九七〇四 宮田 興 『宗良親王詩論』

九七〇三 上原 俊雄

九七〇二 足立 好恵 A Study on Hamlet——復讐と躊躇——

九七〇一 大岩 夕湖 Carpe Diem and English Poetry

九七〇〇 大野 直昭 Thomas Hardy 論

九六九九 笠井 実映 D. H. Lawrence——his life and idea in "Rhyming Poems"——

九六九八 壁谷 亜樹 HARDY'S LOVE POEMS

九六九七 河田 香織 T. S. Eliot —— "The Waste Land" ——

九六九六 木下 奈央子 Thomas Hardy 論——Toss of the d'Urbervilles をめぐり 'Relation' にこころ——

九六九五 木村 美幸 Foreign Language Teaching —— Comparing the U. S. with Japan ——

九六九四 畔柳 しのぶ Thomas Hardy 論——『ター

九六九三

九六九二

九六九一

九六九〇

九六八九

九六八八

九六八七

九六八六

九六八五

九六八四

九六八三

九六八二

九六八一

九六八〇

- バウイル家のテス』について
 Thomas Hardy 論
 Andrew Marvell——From in-
 side of the garden to the his-
 tory——
 WILLIAM WORDSWORTH
 ——the change of the spiritual
 world in "Prelude" mainly——
 A Study on Team Teaching
 with Assistant English
 Teachers
 Meanings and Uses of Pre-
 positions
 A Study on *HAMLET*——主
 人公のオフィーリアに対する愛
 の考察——
 The Mental Aspect of John
 Clare
 A Study on *Hamlet*——Why
 Hamlet pretended to be mad——
 A Study on *Hamlet*——生死観
 を中心として——
- 九三七三三 榑原徹哉
 九三七三三 白川容子
 九三七三四 菅原 薫
 九三七三五 高木順子
 九三七三七 長山淳一
 九三七三六 野村佳代
 九三七三九 服部好恵
 九三七四〇 早川智美
 九三七四三 林 真理子
- 九三七三三 福田賢治
 九三七三六 丸山 剛
 九三七三六 村松美紀
 九三七三六 両角理佐
 九三七三九 阮 赫
 九三七四〇 姜 赫
 九三七四一 阮 芬
 九三七四一 張 梅
 九三七四三 孟 文蕾
 九三七四五 伊藤真希子
 九三七四六 岡田 幸
 九三七四六 柏岡啓子
- Globalization and Cross-
 Cultural Communication ——
 The Importance of Cross-Cul-
 tural Understanding——
 The Difference between
 American and British English
 A Study of *Tom's Midnight
 Garden*
 The world of Emily Brontë's
 poetry
 Thomas Hardy 論
 The Comparison of English
 and Chinese Pastoral
 Vision and Expression in
 William Blake
 Thomas Hardy: *Tess of the
 d'Urbervilles* について
 The Pronunciation of Amer-
 ican English
 Gender Differences in the En-
 glish Language
 James Thomson and his
 Times

九三七三九 北嶋 みゆき Loanwords from English

九三七四〇 権田 亜矢子 The Present Perfect

九三七四一 内藤 幸子 A Study on *Hamlet*——比喩と表現——

九三七四二 星野 理恵 C. S. Lewis 論

九三七四五 梅田 政樹 Milton's idea for God and Human ミルトンの神ならびに人間における思想

九三七三三 鈴木 和浩 Thomas Hardy 論

九三七四〇 森本 芳裕 The Comparison between Japanese and English

ドイツ文学専修

九三七〇一 天野 章子 ヘルマン・ヘッセの「クリンゲルの最後の夏」

九三七〇三 池山 孝平 「旅の絵」について

九三七〇四 上西 利男 ゴットフリート・ベン『詩人は世界を変革できるか』について

九三七〇五 加藤 紀子 ハインリヒ・ベルの『道化師の告白』について

九三七〇六 杉山 恵美 シュトルムの短篇小説「水に沈む」について

九三七〇七 田中 恵 ゴットフリート・ケラー「村

九三七〇八 中野 智美 のロメオとユリア」について

九三七〇九 西澤 貴虎 シュトルム「みずうみ」について

九三七一〇 服部 有紀 グラスヒュット時計産業の復活と時計の歴史について

九三七一 羽場 彩子 ベートーヴェンの生涯について

九三七三三 藤崎 裕一郎 フランツ・カフカの「審判」について

九三七三三 溝口 佳子 シラーの『群盗』について

九三七三〇 久野 恵理 M. Dietrich: Ich bin, Gott sei Dank, Berlinerin を読む

九三七三六 近藤 美和 Buch der Lieder" におけるハイネの技法

九三七三六 三浦 雄一 "Schwarzer Tee mit drei Stück Zucker" von Renan Demirkan——eine islamische Ausranderung in Deutschland und ihre Identität——

九三七〇一 安藤 祥子 ゲーテの「ヘルマンとドロテア」について

フランス文学専修

九三七〇一 安藤 祥子 Honoré de BALZAC 「Le Lys

九三七三〇 糸魚川 雅哉
 dans la vallée」における彼の
 人生と恋愛観
 アンドレ・マルローの「征服
 者」に見られる不条理につい
 て

九三七三〇 伊藤 章浩
 ポール・ヴァレリー『テスト
 氏』についての考察——ヴァ
 レリー哲学を考へる——

九三七三〇 岩田 芳和
 AGOTA KRISTOF Le
 Grand Cahier」作品にみられ
 る「人間」の倫理について

九三七三〇 鶴 飼 奈 実
 ロマン・ロランのベートルヴ
 エン研究——『ベートルヴエ
 ンの生涯』を中心として——

九三七三〇 大石 亜希子
 Gustave FLAUBERT とその
 作品『ボヴァリー夫人』に着
 目して

九三七三〇 小栗 智美
 モーパッサン、小説論と短篇
 『Invité』における
 Beauvoir の生き方

九三七三二 橋本 伸一
 マルセル・ブルーストの作品
 内における女性の役割

九三七三二 長谷川 聡
 Camus——異邦人について——

九三七三三 早川 美和
 「星の王子さま」のことば
 —— L'essentiel est invisible
 pour les yeux ——
 九三七三六 山本 博史
 Michel de Montaigne "Les
 Essais" 死についての考察と
 生きたる英知について

九三七三七 横井 奈津子
 Le Clézio. Le Procès Verbal
 (調書)論

九三七三九 酒井 万紀
 クリステヴァの女性思想——
 おぞましき母による文学——

九三七三〇 山中 賢二
 デュマと「三銃士」——十九
 世紀ロマン派小説家の描く十七
 世紀王朝時代——

九三七三〇 荒川 元博
 マルキ・ド・サド「閨房哲学」
 論

中国文学専修
 九三七四〇 石黒 晶子
 陶淵明——その人物像につい
 て——

九三七四三 伊藤 龍一
 中国の食文化について——清
 朝の宮廷料理——

九三七四四 大嶽 正
 中国の弓と日本の弓
 九三七四五 貝谷 貴史
 聊齋志異
 九三七四六 楠 真子
 中国における教育問題につい

- 三三七四〇八 竹澤英輝 諸葛孔明
 三三七四〇九 辻菜採 唐代における女性のファッションについて
 三三七四二二 山田真由美 唐詩の中の「酒」
 三三七四二三 四元公美 日本における色彩語象徴の比較研究
 三三七四二四 若山恵美子 中国人の「吉」感覚
 三三七四二五 李晶龍 禪詩について
 三三七四二六 八田則子 『略駝祥子』の版本と邦訳について
 三三七四二五 沖宗也 三國志 人物論
 三三七四〇六 小田善弘 「阿Q正伝」について
 三三七四〇七 川口真生子 茶と禪について
 三三七四二三 林峰三郎 長恨歌の研究
 三三七四三三 林優子 中国の洪水神話

中国神話の發展と変遷

九三P四〇〇三 岩田華代子

中国の神話には、日本神話のような統一性がない。日本

神話を見ると、国生みをした伊邪那岐命・伊邪那美命から神武天皇に至る完璧な系図を書くことが出来るが、中国神話の場合にはそうはいかないのだ。例えば、ある書物に「AはBの息子である」と記されていたとする。しかし、他方では「AはBの父親である」と記載されていたりするのだ。要するに、中国神話は混沌と矛盾に支配されているのである。そして、その故に原初のままの神話が残っているのである。

私は、このことを、羿の神話を題材として追究してみた。羿とは、十二の難問を解決した、ギリシア神話のヘラクレスと比せられる程の英雄である。その物語の概要は、以下の通りだ。

偉大なる天帝俊は、その妻羲和との間に、十日——太陽の精である十人の息子——をもうけた。十個の太陽は毎日一つずつ、順番に地上を照らしていた。為に、天地に太陽は十あっても、人が目にするのは、常に一

つだけだったのである。

ところが、ある時この秩序が乱れ、十個の太陽が同時に天に現れるという、異常事態が発生した。十日に照らされた大地は焼け爛れ、井戸は干上がり、穀物はことごとく枯れていった。おまけに、獐猛な獣や悪鬼の類が、これ幸いとばかりに、飢えと渇きに苦しむ人々に襲いかかったのである。

下界の様子を見た帝俊は、武芸に秀でた天神羿を遣わし、人々の害を取り除かせることにした。そこで羿は地上に下り、九つの太陽を射落とし、悪獣を退治したのである。

羿の働きに人々は喝采を送ったが、暗鬱として心晴れぬ者もいた。十日の父親帝俊である。

帝俊としては、少々子供たちを脅しつけ、天の秩序を回復するのが目的だったのでろう。だが、意に反して、羿は九人の息子を殺してしまったのである。帝俊の哀惜は恨みへと変わり、とうとう羿は神籍を奪われ、

妻の嫦娥ともども、俗界へ追放されたのだった。

神から人間へと降格した羿は、その後妻の裏切りに遭い、粗暴な悪人へと墮落してゆき、遂には非業の死をとげたのである。

神々というものは——何処の国の神であろうと——人々の信仰によって生み出されるものである。信仰がなくなれば、或いは、信仰してくれる人々がいなくなれば、神の性格も当然変化せざるを得ない。そればかりか、その存在さえ、危うくなりかねないのだ。

羿の場合も、天神羿を信仰していた部族が減んだ（より強大な部族に吸収・合併された）為に、神から人へ、善から悪へと話がねじ曲げられていったのだらう。

とはいえ、輝かしい経歴を持つ英雄が、単なる乱暴者になつてしまった、というので少々具合が悪い。ここにおいて、羿の善と悪とを具象化しようとする試み——即ち、羿を天神「羿」と悪人「后羿」の、二つの異なる存在へ分化させようという動きが、起きたのである。

羿の分化は不完全なまま終わったが、中には成功した者もいる。例えば帝俊などは、見事に「帝俊」「帝隣」「帝馨」の三人に分化している。これも亦、帝俊を信仰していた部族の盛衰を、そのまま反映しているのだらう。

つまり、神話というものは単なる空想の産物、子供じみた絵空事などではないのだ。神話は、その時代に生きた人々

の生活・闘争・願望から生まれたものであり、偉大なる神々の世界は、実は人間社会のカリカチュアに過ぎないのである。

社会精神医学——個人と家族の問題を中心にして——

九三S五—三四 辻 本 美 枝

ストレス社会と呼ばれる今日、人の心というのが大変注目され、多くの場面において関心が寄せられている。特に日常生活におけるストレスは、急速に変化する現代社会に生きる私たちにとって避けようのない問題になってきている。こういった社会において、いかに私たちがストレスを克服していくべきかについて、具体的に家庭内暴力をとり上げて、現実療法というカウンセリングの一手法を用いて、より充実した生き方への新しい方法を提示していく。

社会学の分野には、社会精神医学という分野があり、精神医学に大きな貢献をもたらしている。社会精神医学としては、精神医療現場での相互作用や医療システムの統制的役割を重視し、微視社会学的観察を主な方法とする相互作用論アプローチと、個人の保健活動や疾病行動に影響する変数を重視し、大量調査による統計調査による統計分析を主な方法とする行動科学的アプローチという二通りのアプローチがおこなわれてきた。

また、精神障害に関係する社会学変数として、最初に注

目された階級という水準は、低階級に精神障害が多いとされてきた。しかし、階級概念が変化してきた今日では、個人がとり結ぶ対人関係の特徴を主として構造的側面からとらえるソーシャルネットワーク、対人関係の機能的側面に注目するソーシャルサポート、さらに援助されるだけでなく、自らの援助の提供をおこなうセルフヘルプグループという社会の抽象水準がある。

現代社会の病理として、時代の病理や社会の変動を鋭敏に反映する鏡である少年の問題、特に家庭内暴力は、精神障害とのかかわりも深い。子ども自身、思春期に入り依存から自立へと向かい自我同一性を確立するという特有の課題をもちはじめると、そんな中で自立できない弱い自分直面した子どもは、焦燥感の発散に暴力を振うようになりする。また母子共生的関係の中でさらに親離れしづらくなったり、父性の欠如などで子どもモデルとなるべき姿が喪失されつつある。さらに、学歴社会、偏差値教育など子どもに与えるストレスも過大になってきている。

現実療法というカウンセリング手法はアメリカにおいて青少年の非行など精神障害を含めた広い意味での社会的落伍者の問題に取り組んでおり、大変な成果が上げられている。この療法から少年の問題を取り上げると、親は子どもに多くをしすぎてはならない。子どもと共にすることは大切であるが、子どもに代わって、子どもに対してしすぎないことである。親子関係というものが大変重要なものであるので、親の役割が事態を左右してくるといっても過言でないだろう。社会の面からの改善も必要だが、直接的に影響を及ぼす親子関係の改善が何よりも大切であると思われる。そして、個人個人がより充実した毎日を過ごすために欲求充足を円滑に満たす努力が必要である。人が悩む、問題をかかえている時というのは、欲求充足がスムーズにおこなわれていないからである。W・グラッサーは人間の基本的欲求は、生存・所属・力・自由・楽しみがあると述べている。これらを自分のレベルで満たすことこそがストレス克服にもつながるわけである。そして自分自身をうまくコントロールするためには、感情に焦点を当てるのでなく行為や思考を中心にするのが大切である。

心が病むということは、この複雑な社会の今日、珍しいことではなくなってきた。原因は個人だけのものではないが、一度病んでしまうと、立ち直るには本人の力でしか直せないつらさがある。こういった苦しみを味わわない

ようにも、日々のセルフコントロール、良好な人間関係・環境づくりに努めたいものである。

中流意識を通してみる日本人の「豊かさ」感

九三S五一四四 長谷川 友紀

日本人の九割が中流意識を持っているといわれている。

これは毎年総務庁が行なっている『国民生活に関する世論調査』の中のある質問で、日本社会を五つの階層に分けて考えた場合、自己の所属階層を「中」と答える人が九割に達するという結果からいわれるようになったことである。

この事実に対して、なぜこれほどまでに多くの人々が中流意識を持つのかという疑問を持ったのを始まりとして、中流意識と、さらに、その判断に密接に関わっていると考えられるくらしむきの豊かさについて、人々はどのように捉えているのかということをも「豊かさ」感、満足感といった角度から考察してみた。最後に、現在のの中流意識の意味を自分なりにまとめた。

まず第一章で、中流意識増大の社会的背景をみた。中流意識はちょうど高度経済成長期に対応して急激に増大しているため、この時期に起こった社会構造の変化を整理した。就業者構造、所得、教育、消費生活の四点を取り上げたが、これらに共通していることは「平準化」ということであ

った。

第二章では、中流意識増大に直接関わる要因は何か考察するため、これまで行われてきた数々の中流意識研究を整理してみた。大別すると経済的要因の説と非経済的要因の説とに分けることができるが、後者では特に大量の新中間層が出現したかいなかということが焦点となっていた。色々な方面から解釈の試みがされたが、論者のほとんどがもつと心理的側面から分析を深めることの重要性を指摘していた。そこで第三章で、より心的な側面からの分析として一般化的研究を取り上げた。

この第三章までの考察で、中流意識を詳しく解明するためにはより心理的な側面に注目することの重要性がはっきりした。しかし、従来の研究にもやはり限界があり、それを越えるために、中流意識に密接に関わる「豊かさ」感というものについて、豊かさの価値観や満足感を中心に第四章で考察した。

さて、これまでの考察からいえることは、一般に中流意

識と呼ばれている意識は階層の主観的自己判断であり、「中流」ではなく「中」意識であるということである。そして、中意識つまり人々の豊かさ感是非常にあまりで多様な側面を持った意識であるということである。一方では経済的豊かさを重視し、また一方では精神的豊かさを求めるという性格を持っている。このような意識であることを前提に現在の中流意識について解釈すると、その年ごとに表れる増減は経済的豊かさ重視の側面が影響して細かな動きを示す。そして、大きな流れでの九割中流意識は、豊かさの価値観として心の豊かさを重視し、その心の豊かさの面で多くの人々が満足感を感じているということと解釈できた。

ここで最後に、これから階層意識研究を進めるにあたっての問題点を指摘しておきたい。一つは概念上の問題である。今まで扱ってきた中流意識は、自己の所属階層を「中」と位置付ける主観的な判断であった。この意識を持つ人が九割であることに對し、なぜこれまで多くの人が中流意識を持つのかということが従来の諸研究の出発点であった。それはつまり、客観的に中流の条件を備えている人も、いない人も一様に中流意識を持っているという事実に對しての疑問であったと思う。この問題に關して、今回の論文では満足感との関連で解釈を試みたが、客観的な階層区分と人々の主観とのズレの問題は、これからも階層意識研究の

大きなテーマになっていくと考えられる。二つ目は調査上の問題である。豊かさ感が主観的な意識である以上、世代や性別などの違いが影響してくるのは当然である。今後はこういった属性の違いもふまえたうえで、主観と客観との問題にも取り組む必要があるだろう。

渡辺政香に関する一考察

九三〇三八 宮地 靖

渡辺政香（以後、政香）は安永五（一七七六）年七月十日六日幡豆郡寺津村に生まれ、二十四歳の時に家督相続をして寺津八幡社の十四代当主となり、六十五歳でこの世を去った。

今日、政香は三河の歴史的事跡を集めた全部で四十三巻からなる『參河志』や天保七（一八三六）年の加茂一揆を記録した『鴨の騒立』の著者として知られている。

政香についての研究は、『鴨の騒立』を主として一揆に関する内容のものや吉田・白川両家の抗争が記録されている『伯卜論書』をもとに、この争論に関わった政香の様子を述べたものを中心で、現時点では不十分な点やまだまだ研究されていない分野も少なくない。

そこで、本論では師友から政香への学問的影響について再検討を行い、『伯卜論書』、『神祇道正統記弁』、『小槌』という書物から神職としての政香を捉えてみた。また、従来あまり研究されてきていなかった政香の門人や政香の書物が取められていた寺津八幡書庫、そして、政香と共に伯

卜争論に関わった神職者たちにも迫り、政香の研究の新たな一面も述べてみた。

第一章では、政香の家庭の様子に触れながら、政香が浜島文貞、山口四巷、足代弘訓、植松茂岳という四人の師と同学の友であった羽田野敬雄からどのような学問的影響を受けたかについて考察した。

まず、四人の師の中でも浜島や山口からは漢詩の添削がなされ、この二人の師は非常に旅好きなこともあって、現在残されている政香の旅行に関する書物のほとんどが、この二人による指導の時期であることがわかった。

また、足代や植松からは作歌指導を中心に受け、両者とも本居大平の門人であるため、政香は本居系国学にも接することになった。とりわけ、足代と政香との手紙にはそうした面が現れている。

そして、羽田野敬雄との出会いによって政香は、平田篤胤に傾斜して行き、これは羽田野が平田門であったからである。このため、政香は篤胤の書物を自分の書物の中に引

用したり、篤胤のところへ訪れることもあった。

第二章では、吉田・白川両家の神祇道支配における勢力争い（伯卜争論）に巻き込まれた政香を、先行研究に助けられつつ描き出してみた。

また、政香だけでなく、この争論に関わった人物についてやその者たちと政香との関係についても考察した。中でも、幡豆郡大浜村熊野権現下宮の神主である長田求馬という人物がどういふものなのか明らかになった。

さらに、このような争論を通じて、政香が書いた『神祇道正統記弁』や『小槌』から政香の神道観を追求してみた。

第三章では、従来の研究にあまり見られなかった政香の門人と寺津八幡書庫を考察した。

まず、前者については『寺津村保宝葉園門人記』によつて七十二名の門人が明らかになり、身分別、地域別に分けてみた。驚いたことに僧が四十一人で最も多く、地域的には寺津周辺が多く見られ、遠隔地域からは学者（俳人）及び宗派的なつながりの寺院が目立った。僧の門人が多いため宗派別に分け、この結果、浄土宗西山深草派が半分以上であった。この西山深草派に対して、政香はどういう行動をとっていたか、また、門人の中で寺子屋をもつものや政香の指導を受けて開いたと思われる寺子屋があるかどうかも調べてみた。そして、門人とは別に政香は、九十八人の筆弟子をもっていることが明らかになった。

後者については『八幡書庫記』の序文をもとに、政香がどういふ思いで寺津八幡書庫を建てようとしたかを考察した。

政香にとつて書物は至宝であり、書物の保管や収集についてどうすべきかを長年の間考えていたようだ。

以上のように、三つの章から構成され、第一章と第二章で従来の研究を主に再検討し、第三章で新たにわかったことを述べてみた。

鎌倉期備後国大田荘における荘園領主高野山の荘支配構造について

—— 預所の分析及び大田荘支配に関わる寺院構造についての分析 ——

九三五六〇四〇 横山和弘

備後国大田荘に関しては、代表的な中世荘園として数多くの研究史が蓄積されている。それらの多くは、在地領主制論・中世村落論を中心に考察されたものであり、荘園領主高野山側の視点で考察を行ったものは、ほとんど存在していない。

以上の研究史的前提を踏まえ、本稿では、鎌倉期をとおして、荘園領主高野山の大田荘支配の構造・体制が、どのように変遷・展開していくのかについて考察を行った。

第一章では、鎌倉前期建久年間に僧饒阿を中心として整備された高野山の大田荘支配の体制Ⅱ預所体制が、いかにして鎌倉後期弘安から正安頃に見られるような質的変化をきたした状態となったのか、その変質の過程を、鎌倉中期の歴史具体的事実を認識することにより、検討した。

預所は、貞応・天福・嘉禎期頃に預所代・御使等を介して在地性を深化させ、寛元年間に至り現実に荘家に下向し、

質的変化を遂げていった。質的変化をきたした預所の様相は、鎌倉後期になって初めて在地性を深化させ、質的に変化したことを意味するものではなく、それは鎌倉中期以来の預所と在地との関係の中で歴史的に準備されていたものであった。

第二章では、鎌倉中期における預所の在地性深化の過程が、どのように大田荘の歴史的展開過程の中に反映されているのかについて検討した。その際、分析のメルクマールとして、相論争点の推移に注目した。

鎌倉中期における預所の在地性深化の過程は、大田荘の歴史過程の中に相論争点の変化という形になって確実に反映されていた。

第三章では、鎌倉後期・末期における高野山の大田荘支配の在り方について検討した。

まず衆徒の変質について。相論主体の変化に注目して、

大田荘支配の過程における高野山衆徒の変質はいつ起こったのかを考察した。

考察の結果、衆徒の変質は、寛元年間頃元起り始めることが認められた。衆徒の変質と預所の変質とは、期を一にしていたのであり、それは寛元年間頃のことであった。

次に預所(雑掌)に補任される人物の高野山教団内での階位の変化について考察した。

預所(雑掌)に補任される人物の階位の変化は、十四世紀初頭に行われた高野山の荘園支配の再編と関係していることを指摘した。高野山は、十四世紀初頭に、鎌倉中期以降の在地性深化の過程の中から登場してきた在地領主的性格の強い預所(雑掌)を失脚させ、寺院内部の人物を預所(雑掌)に補任し、荘園支配の再編を行ったと考えられる。

次に十四世紀初頭の荘園支配の再編以後、衆徒と預所(雑掌)とは、どのように関係し合っていたのかについて検討した。

従来、鎌倉末期において、衆徒は荘務の在り方を支配・監督する権限を放棄していると指摘されているが、決してそうではなく、衆徒は背後からしっかりと預所(雑掌)の動きを統制していたことが認められた。

従来、鎌倉後期・末期における高野山の荘園支配の在り方は、文永・弘安年間頃より変質の兆しが見え始め、十

四世紀に入るとその変質が顕在化すると指摘されている。

しかし、決してそうではなかった。高野山の荘園支配の在り方は、寛元年間頃より変質の兆しが見え始め、その変質は十三世紀後半に顕在化する。そしてその変質は、十四世紀に直接つながるのではなく、十四世紀の初頭に荘園支配の再編があったのである。

鎌倉期における高野山の荘園支配の過程には、二つの転換点があった。一つは鎌倉中期寛元年間頃のことであり、もう一つは十四世紀初頭のことである。十四世紀初頭の荘園支配の再編は、寛元年間頃の荘園支配の転換を歴史的前提としており、その延長線上に必然的に現れた再編であったといえる。

土岐川最上流部における無機態窒素の起源について

九三六二〇一 足立賢一

土岐川は岐阜県東濃地方の夕立山を水源とし、愛知県尾張地方を経て伊勢湾に流入する幹川流路延長九六キロメートル、流域面積一〇一〇平方キロメートルの河川である。なお、土岐川とは、庄内川の岐阜県側の名称である。

これまでに著者は、中部地方で最も人口が集中している庄内川水系で水質調査を行なってきた。その結果、中下流部だけでなく最上流部でも多量の無機態窒素、リン酸態リンが溶存していることが判明した。このことは、富栄養化が最上流部でも進んでいることを示している。

富栄養化が及ぼす影響は大きい。川水中の栄養塩の増加は、動植物プランクトンの異常発生を生じて、生態系のバランスを崩す。また、富栄養化した水を上水道に利用すると、異臭を生じる。栄養塩の中でも、無機態窒素は人の健康に害を与える。無機態窒素は、体内で発癌性物質のニトロソメチルアミンを生じる。多量に摂取した場合には、メトヘモグロビン血症を起こす。こうしたことから、河川、湖沼、海洋における富栄養化の研究は不可欠である。

そこで本研究では、多量の無機態窒素の流出が問題となっている土岐川最上流部で、それが何によってもたらされているかを考察した。

本研究では現地で川水を採取し、イオンクロマトグラフイーを使用して、アンモニウムイオン、亜硝酸イオン、硝酸イオンを定性定量分析し、その上でアンモニア態窒素、亜硝酸態窒素、硝酸態窒素に換算し、これらの合計を無機態窒素とした。

調査は、無機態窒素の流出が灌漑期と非灌漑期とで異なることから、灌漑期として一九九六年八月、非灌漑期として同年十月に行なった。また、降水の採取を同年十月の一月間行い、無機態窒素を川水と同様に分析した。

各種土地利用及び人口密度と無機態窒素の流出(比負荷)との間の回帰分析を行なった結果、集落面積率及び人口密度と無機態窒素の流出との相関係数各々 $r=0.82$ 、 0.58 が最も有意であった。よって、大部分の無機態窒素が生活排水に起源すると言える。

排水の対策だけでなく、適切な林地の保全が必要である。

しかし、灌漑期と非灌漑期では相関係数は大きく異なる。灌漑期では人口密度や各種土地利用との明確な相関はなかった。これに対して、非灌漑期では集落面積率 ($\gamma_{II} \circ \circ$ ・八七)、人口密度 ($\gamma_{II} \circ \circ$ ・七二)、畑地 ($\gamma_{II} \circ \circ$ ・六三) の順に相関が高い。灌漑期に相関が低くなるのは、川水が水田を経る過程で、溶存無機態窒素が除去されるためである。このことは、水田のある小流域での非灌漑期と灌漑期との無機態窒素濃度差が、その水田面積率と密接な相関 ($\gamma_{II} \circ \circ$ ・八二) を示したことから明らかである。

このような灌漑期の水田における無機態窒素の除去機能は、源流部の林地でもみられた。

降水中の無機態窒素濃度は、二・一四 ppm であった。これに対して、最も源流にある林地だけの小流域から流出する無機態窒素濃度は、 $0 \cdot 1$ ppm 前後であった。この差およそ二 ppm は、林地で無機態窒素が吸収された分であると考えられる。

しかし、伐採などの開発行為が進んでいる他の多くの林地の流域では、無機態窒素濃度は $0 \cdot 5$ ppm 以上であった。このことから、自然状態でない林地では、無機態窒素の除去機能が低下していると考えられる。

大気汚染が進む今日、降水による無機態窒素の負荷は、大きくなりつつあると考えられる。このことが、水域の富栄養化に与える影響は大きい。今後、人間活動にともなう

『藻屑物語』研究

『藻屑物語』とは、近世初期に成立した男色の小説である。ジャンルとしては仮名草子に分類される。残念ながらこの作品は今まであまり注目されておらず、ほとんど研究がなされていない。私はこの論文において、あえて限定したテーマは設けず、今までなされていなかった、『藻屑物語』の総合的研究を行うことにした。

最初に、『藻屑物語』がどういう作品か考察してみた。『藻屑物語』という作品は、次の二点に文学的価値を見いだすことができる。第一点は、浮世草子の男色ものに影響を与えたことである。文章や人物関係などから、確実に影響が見られる作品だけで『風流嵯峨紅葉』『好色江戸紫』『男色大鑑』『男色義理物語』の四作が認められる。間接的にはもっと多くの作品に影響を与えたはずである。一つの作品が短期間に、模倣作とも改作とも言われる、影響作を四作も生み出したのは、あまり例を見ないことである。第二点は、仮名草子において、この手の男色小説がほかに見当たらないということである。つまり、『藻屑物語』は近

九三七七〇三三 濱口順一

世の男色小説の先駆的作品と言えるのである。それに加え、『藻屑物語』以前には稚児物語はあったが、武士の男色物語は見当たらない。『藻屑物語』は武士の男色小説の祖であるとも言えるのである。『藻屑物語』が今まで注目されなかったのは、実録であるというのが最大の要因であった。確かに、『藻屑物語』は『紫の一本』『日牌回向簿』の記述、桜川侍従が実在する堀田正盛であったこと等から、事実をもとにしていることが分かる。しかし、『藻屑物語』は事実そのままではなく、物語としていろいろと脚色がなされているのである。

次に、『藻屑物語』の影響作について考察してみた。『藻屑物語』の影響作のうち、内容が大幅に変えられている『好色江戸紫』を除く三作は、人物関係が異なるだけで、ほとんど『藻屑物語』と同じである。しかし、その三作では『藻屑物語』の將軍に関する記述が、ほとんど書き換えられているのである。『藻屑物語』の影響作が出た時代は、男色が禁止されていたのにもかかわらず、盛んだったようであ

る。影響作では一応禁止されている男色のことを扱うため、お上をはばかり『藻屑物語』の將軍に関する記述が書き換えられたのである。

最後に、『藻屑物語』とその影響作を通して、当時の男色というものを探ってみた。『藻屑物語』の主要な登場人物はすべて男色で構成されている。これは当時、武士は一定の年齢になると兄貴分を持つのが当たり前だった、という時代背景の現れであろう。『藻屑物語』の登場人物において、同じ男色であるのに、右京と采女は肯定的に描かれているが、左馬助・主膳・松斎は否定的に描かれている。それはなぜか。武士の男色と殉死は当時あまりよくない風習とされていたが、どちらも武士らしい行為だった。男色も殉死もどちらも（死に向かう思想）であり、武士道に通じるものである。『藻屑物語』でも（いさぎよい死）というものが一つのキーワードとして浮かび上がってくる。左馬助も松斎も主君に背いたことに加え、いさぎよく死ななかつたので処刑されたのである。主膳もまた、右京を討つた後いさぎよく死のうとは考えず、逐電しようと考えていた。つまり、左馬助も主膳も松斎も死に対していさぎよくないので、否定的に描かれているのである。右京と采女が肯定的に描かれているのは、采女も右京も死に対していさぎよいからである。そして、それに加え、二人の間に肉体的関係がなかつたことも、肯定的に描かれている要因の一

つであろう。肉体的関係がない精神的な男色が罪ではなかつたことは、『好色江戸紫』の記述等から分かる。

正宗白鳥『玉突屋』の研究——自然主義文学における言文一致の研究——

九二七七〇一六 坂本良裕

この『玉突屋』という作品は、原稿用紙にして八枚という、極めて短い作品である。深夜の孤立した空間の中で、従順な少年と、利己的な性格の大人たちの、ごくありふれた都会での日常を描いている。

作品の発表の翌年、相馬御風に、ロシアの作家チェホフの「ねむい」をモチーフに描かれていると指摘され、白鳥自身もそれを認めている。たいした事件もなく、淡々と物語が進行してゆく手法は、チェホフの影響であろうし、当時の文学が海外の文学に、かなり依存していたことを窺わせる。この点から「比較文学」を活用しようと試みた。

古来、卑下されてきた文学は、西洋文化の流入によって、次第に認知されるようになった歴史的な背景から、日本の小説というジャンルでは、海外文学のもつ表現の方法や物語の展開、比喩表現など、強く影響したため、海外文学をモチーフに描く作家は、白鳥に限ったことではなかった。そして『玉突屋』では、見事なまでにその手法を取り入れられている。

私は『玉突屋』を研究するために多くの論文を目にしたが、私が読んだ『玉突屋』の印象とは全く違うことに困惑していた。

多くの論では、ボーイが主人公であるかのように論じられている。確かに比較文学の面から考えるとボーイが主人公のように思える。しかし、自然主義という面からでは、ボーイは主人公ではない。作品の人物設定が曖昧なためにおこる錯覚である。

登場人物の性格を決定するものとして、『玉突屋』の登場人物について調べると、三つの要素が他より多いはずの主人公は、誰一人として存在しない。つまり、主人公を中心に物語が展開しているのではなく、その概念さえもないのである。あえて主人公を挙げると、「角帽の青年」が、自然主義の立場から見ても、それに最も近いであろう。

この要素を四人それぞれにあてはめてみると、面白いことに気付く。四人は、実に対称的に描かれているのである。

これは当然、「玉突（四つ玉）」を象徴している。だから主人公を必要とせず、五人目の人物も登場しない。そしてまた、極めて情報量の少ない作品に関わらず、世界観がしっかりしているのは、こういった手法が潜在しているからである。

しかしこれは主題ではなく、作品を形成する要素の一つにすぎない。この作品の主題は、もつと大きな背景を視野に入れねばならない。

文学界に直接影響を及ぼした、明治政府の国策に、「言文一致」が挙げられよう。また、これと同様、文壇は自然主義が隆盛を極めていた当時の背景を無視してはならない。それらから導き出された結論として、白鳥が西洋文化を盲信している風潮に対する批判が、主題として浮かんでくる。

「言文一致」が成就すると同時に、日本語の正書法や表記の仕方にも、当然、江戸時代のそれとは異なった「約束」が出来た。例えば、読点や段落といった、読み易さの手助けとなる表記が出現したのである。

この画一的な「約束」には、賛否両論あったが、白鳥の『玉突屋』や『何處へ』のように、段落の字下げを統一しないものは、不自然である。「言文一致」も、それに伴う問題も、一応解決していた時期に、あえて段落を不統一にする不自然さを、私は『玉突屋』の主題であると考えている。

白鳥が、西洋文化を盲信する風潮を快く思っていないから、かつて信仰していたキリスト教を離教したことからも窺える。キリスト教と白鳥の關係については、本論で言明しているが、そういった自分の主張を、うまく表現できなかった白鳥の、苦肉の策であると私は考えている。福沢諭吉のように言明する勇氣を持たない、不器用な作家である、というのが、私の正宗白鳥像であり、『玉突屋』の主題である。

A Study on Team Teaching with Assistant English Teachers

九三七一一五 高木 順子

一九八七年（昭和六二年）八月、日本の英語教育界に新風が吹き込んだ。Assistant English Teacher (AET) と呼ばれる英語を母国語とする人たちが全国各地の中学校・高等学校に配置されたのである。この制度は、地方自治体と文部・自治・外務の三省の共同事業として、外国語教育の充実と地域レベルでの国際交流を目指して、「語学指導等を行う外国青年招致事業」(Japan Exchange and Teaching Program) が発足したことに始まる。こうして日本人教師とAETとの共同授業 (Team Teaching (TT)) が行われることになった。この場合の Team Teaching とは、「生徒・日本人教師・外国人講師の三者が共同して作り出す言語活動を主体とした英語の授業」(Brumbly and Wada, 1990) と定義された。

第一五期中央教育審議会答申においては、二十一世紀に向かつて急速に進む国際化に対応すべく、国際理解教育の充実が求められている。このような時代の要請の中、英語科においては、コミュニケーション能力の育成と国際理解

の基礎を培うことが主な課題であり急務となるだろう。そのため、今こそティーム・ティーチングの可能性を広げ、英語教育の中心に位置づけるべきときではないだろうか。

本論文では、私の教育実践経験が皆無に等しいという事実上、授業実践に関わる技法や構想といった実質的な内容の研究、つまり実践論を取り扱うには無理があるため、その切り口を主に個人的経験に基づくいわばTTの実態論に定めた。考察を進めるに当たっては、二つの視点を念頭に置いた。一つ目は、自身が学生として受けてきたTTを振り返る一生徒としての視点。二つ目は、教育実習時のTT実践により学び、感じ、考えたこと、また現場の先生方からお聞きしたご意見を通して少しばかり垣間見ることができた教師側の視点である。全章に渡ってこの二つの視点を明確に打ち出し、現場に携わるAET、日本人教師、生徒の授業での姿が見え、声が聞こえてきそうなように意識した。そうすることにより、TTの持つ特質を整理し、実践的な見地から考察し、効果的に授業を進めるための手掛か

りを得たいと考えたからである。教育・授業実践による裏付けに不足する部分では、財団法人語学教育研究所、静岡大学教育学部、熊本大学教育学部心理学研究室が、それぞれ全国規模、県規模、学校規模で行ったAETやTTに関する実態調査や意識調査による結果や新聞記事にその論拠を求めた。

第一章では、TTの明と暗の側面のうち、明の部分、AETを導入することによる生徒への効果と教師への貢献を取り上げる。「音声の指導、本物の英語の習得、異文化の存在の認識と相互理解、英語学習への動機付け、英語でコミュニケーションがとれたという喜びの体験」など、語学教育の充実ばかりでなく、国際理解力の養成への効果は大きい。一方、教師自身が蒙る利点も見逃せない。「言語運達能力の再訓練、教授法の改善、他教科の教師への英語研修の機会の提供」など、学び続ける教師にこそ教える資格があるということを再認識する絶好の機会であり、大いなる刺激となる。

TTの実態論という観点からすると、第二章は本論文の中心となるものである。章題に「TTの形態」とあるが、外見的分類による形態の類型を扱うのではなく、日本人教師とAETそれぞれの特質の生かし方と役割分担、言語活動の内容を、便宜上外見的分類による枠組みを使って考察する。AETの数と学校数の関係、及び訪問期間などによ

り、i) One Shot Visit (年一―三回単発的にする訪問)、ii) Regular Visit (週一回か二週間に一回の定期的な訪問)、iii) Base School (一年間同一校に滞在し定期的に授業を行う)以上の三つに分類される。

第三章では、AET、日本人教師、生徒それぞれの立場から挙げる、TTに関する問題点、つまりTTの暗の側面に耳を傾け、本音のぶつかり合いの中から解決策や改善策を探り、より効果的なTT実践への要をつかむ。

終章では、教授実習での私のTT実践例を紹介し、実体験を通して学び発見した課題を述べてまとめとした。

日本の英語教育の真の改革、充実、発展にAETとのTTが益々有効に機能し、国際社会の中で生きていくこれからの日本人が「笑ってばかり」「いるのではなく、公平で幅広い国際的視野を持ち」もの申す「よう徐々に変えていくことがTTにはかりでなく、英語科全体に、ひいては二十一世紀の学校教育に課された責務である」と思う。

Thomas Hardy 論

九二七七一一三 鈴木和浩

フランスの批評家ルネ・ジラールは、欲望が社会的性格を持つという観点から、模倣的欲望という概念を提示した。人間は誰も自発的に欲望する事が出来ず、「欲望の媒介」と呼ばれる他者の欲望を模倣しているに過ぎない、と彼はその著作『欲望の現象学』で述べている。また彼は、小説形態を「ロマネスク的作品」と「ロマンティック的作品」の二つに分け、模倣的欲望を賞揚し、生の否定を提示する後者の虚偽性を告発する。作品の結末において模倣的欲望を放棄し、生の肯定を掲げるロマネスク的作品の中にこそ、ジラールは真実をみている。本論は、この欲望論に基づき、トマス・ハーディの『ダーバヴィル家のテス』における、アレク、エンジェル、テスの主要三人物の欲望の模倣性を明らかにし、そのメカニズムを説明する事によって、この作品がロマネスク的であるかロマンティック的であるかを考察するものである。

模倣的欲望の存在を明らかにする為には、必ずしもテキストに明示されている訳ではない媒介の存在を指し示す必

要がある。例えばエンジェルの欲望には一見、媒介が存在しないかのように見える。しかし、欲望の対象であるテスを「詩の権化」と捉えた事や、彼女をギリシャ神話の女神に喩えた事は、隠された媒介の存在を明らかにする。エンジェルは詩人の描くバストラルな世界をテスに見、それに基づいて観念的に理想化した女性を欲望したのである。彼の媒介は、詩、神話といった観念世界である。彼は、詩人や、女神を欲望したギリシャの神々の欲望を模倣しているに過ぎないのだ。

死への接近は模倣的欲望からの遠離であるとジラールは述べた。死に瀕した人間は昔の観念を否定し、自己の媒介を否認する。小説におけるこのような結末を、ジラールはロマネスクの結末と呼んだ。

この作品においてロマネスクの結末を体现するのはエンジェルである。テスの過去の過ちの告白を聞き、絶望的な気分でブラジルに渡ったエンジェルは、そこで病気になる。死に瀕した彼は、早まった決断を後悔し、自分の昔の観念

を否定する。このエンジェルの回心は、すなわち模倣的欲望のロマネスク的死を意味する。テスに「きみの本当の姿を見なかったんだ！」と自らの過ちを告白するエンジェルは、もはやいかなる模倣的欲望にもとりつかれてはいない。そしてこの小説がエンジェルとライザ・ルーの二人の描写で終わっているのは、『テス』が出現する第二の誕生を予告するロマネスク的結末の象徴である。

一方、テスには、エンジェルに見られたような過去の否定の声は聞かれない。よって、模倣的欲望の側面からのみ考えた場合、ロマネスク的回心が欠如しているテスは、欲望に勝利出来ぬまま死んでいったと言わざるを得ない。型通りのロマネスク的結末は、テスによって体现される事はなかった。しかしそれよりも重要なことは、『テス』は決してロマンティックの虚偽におちいった作品ではないという点である。この作品は決して「生の否定」を賞揚してはいない。それとは正反対に、主人公テスの必至に生きんとする姿を通して、生きることを賛歌し、生を肯定する、ロマネスク的要素を持った作品である。

テスにおいては、この生の肯定は、度が強すぎて社会の枠組みを大きく逸脱することになり、結果として悲劇を招くことにはなった。しかしそれは、この作品がロマネスク的であらしめる重要な要素であることには変わりがない。

Michel de Montaigne "Les Essais"

死についての考察と生きる英知について

九三七七三六 山本博史

宗教戦争、ベスト、ルネサンスがとり囲む中世フランスでミッシェル・ド・モンテーニュはその生涯を送った。彼は教育（里子に出される→大学で法律を学ぶ）を受けた後、法曹界に身を置く。その後一度は世間を離れ隠遁したものの、ポルドー市長に選出された。再選されたことにより、計四年の市長の職ののち、二度目の隠遁を果たし、余生を送る。

著書「エッセー」はその生涯を通して執筆され、一五八〇年版を皮切りに数回にわたり版が重ねられた。最終版は、死後身内が遺稿を刊行した形の一五九五年版「エッセー」である。

このように、モンテーニュの一生を通じて執筆され出版された「エッセー」は、人間の性状を明らかにし、それとどうつき合っていくかという思想の統合の過程であると考ええる。まず彼は人間が生きてゆく上で避けることのできない

事実や性状——ある意味それは人間の全て——を把握しようとした。そのために彼の全体からある一部分を切り取り、それを把握すべく執筆した。それとつき合う最良の方法を導き出すために行うのが考察である。それはエッセーへの書き込みという形で見ることができ。モンテーニュは彼自身の性状について考察を深めつつ、導き出す方法に一般的な広がりを持たせていたのである。

さて、このような「エッセー」の執筆の契機になったものとして、一つにエティエンヌ・ド・ラ・ボエシとの交友・その死をあげるができる。

高等法院の同僚ボエシとの友愛については、「エッセー」第一卷二八章「友情について」に明らかである。それによると、「三世紀に一度の友情」であり、《靈魂が互いに混合し、渾然ととけあっている》ものだった。若かったモンテーニュに、ユマニストであり詩人であったボエシはまた、

徳の尊さを教えた。思想・文学の面での影響が多大であったと考える。このような交友も、ボエシの死により、その五年間の幕を閉じた。モンテーニュはこののち最初の隠遁を果たし、失意のうちにも鋭敏な感覚で、I・二〇「哲学するとは、死ぬことを学ぶことである」他を執筆し始める。死というものがモンテーニュに「エセー」を執筆させた動機であるとともに、一つの主題となっていると考えられる。「エセー」全三巻計一〇七章のうち、直接に死を扱った章は実に一一章もあり、これは「エセー」執筆のいつの時期においても死の考察を行っていることを教えるからである。

彼モンテーニュは、死を恐れない平穏な日常が真の快樂であると説く。死の恐怖は全てを暗転させるものなのである。そこで、死から目をそむけるよりむしろこれを念頭に置き、死とつき合っていく方法を主張する。

《我々は至る所で死を待ち受けよう》《死ぬことを知ることによって、我々はあらゆる従属と拘束から解放される。》
モンテーニュにとって、死は生と同じ空間、同じ時間存在するものである。生の中に死を見、死の中に生を見ているのである。また、死の恐怖ということについては、恐ろしいのは死ではなく、死への接近であると指摘する。接近は苦痛を伴うからである。これに関して、彼の落馬事故で氣を失ったという経験から、苦痛は経験により克服でき、

それが死の恐怖の克服になると説く。死それ自体がわからなくとも、死の恐怖が克服できるというモンテーニュの見事な知恵であると言うことができよう。これら死についての考察は、生への努力に他ならない。死を思い浮かべながら平穏で、より良く生きようと努めるモンテーニュの人生は、平穏な死を迎えることで初めて完成するということなのである。

モンテーニュはその死に際して、死の床でカトリックの正式のミサを僧に依頼し、祈りをささげ、家族・友人の見守る中、静かに息を引き取ったという。彼の生きる英知の完成された瞬間であつたといえるであろう。

クリステヴァの女性思想——おぞましき母による文学——

九三七七三一九 酒井万紀

Julia KRISTEVA (1941-) の名が、男性一色に塗り込められた現代思想の系譜に忽然と姿を現したことで自体に、意義を求めるべきではなからう。しかしながら彼女の思想は、広汎な学問領域に加え、母性体験に裏付けられた独自の理論に依るものだ。本論考の主題は、クリステヴァ理論の根幹を成す主体思想を軸に、「女」の像を多角的に検証することである。

精神分析的観点からの考察として、言語の習得過程 || 社会秩序への参入過程 || 主体の形成過程というフロイト及びラカンの理論を踏まえながらも、クリステヴァはエディプス期を経て自己確立を遂げた主体の内に、なお留まり続ける「母」の存在を指摘する。これを「おぞましきもの」(le objet)として内包し語る主体が、『詩的言語の革命』に定義される le symbolique, le sémiotique の概念によって解明されている。

ある種の精神病患者の言説及び前衛詩人のディスコースは、通時的に見た主体形成以前の段階への廻行と見做され

る。彼が語る時、かつて棄却したはずの「母」は音楽的快楽として彼を脅かし、統辞構造を炸裂させ得る。しかもこの女性的なる否定性とは、一種の記号として男女ともが担い得る要素であり、語る主体自身は「有性化の外にいる」者なのである。

その最たる例として『恐怖の権力』に分析されるセリ―又は、ユダヤと女に対する恐怖——魅惑の両価性としての「おぞましき」に憑かれ、そのテクストは主体——客体の中間にあつて強く情動性を負荷されていた。

では、これほどまでに激烈な破壊力を秘めた「おぞましきとしての女」は、歴史上いかにして確立を見たのか。クリステヴァによれば、人類の文化や宗教とはカタルシスに属するものである。隷属すべき下等な性である女は、皮肉にも種族の存続に不可欠な財産でもあり、この矛盾こそ家父長制を脅かすおぞましきそのものだった。その結果、生殖の営みにおける母の絶対的権威を「不浄」として排除する必要が生じたわけである。

さらに興味深いことに、この不浄は「聖なるテクスト」にまで顕れていた。旧約聖書に見られる嫌忌^{taboo}、^{dominations}分析において、彼女は「近親相姦のタブー」に言及する。申命記「仔山羊をその母の乳で煮てはならない」などの戒律は、母と息子の異常な結合に対する極度の恐怖を象徴するものと解釈されるのである。

このように母系制から父系制へ、多神教から一神教へと移行に伴い、母権が穢れとして「浄化」された経緯と、語る主体と引き換えに棄却された母との、言わば二重の排除に注目すべきである。クリステヴァは、「母なるもの」の抑圧とは元来女性に対する何らかの憎悪に由来するのではなく、人間が語る主体としてそれを分離せねばならないという論理的必然性に即応する、と結論づける。家父長的西欧社会秩序の成立基盤となった、遠大な企みを暴き出す試みと言つてよい。

では、こうした諸概念は女の芸術創造行為をどう位置づけ得るか。クリステヴァにとって、女性とは即ち母性であった。妊娠から出産への母性体験は、自己の内部に他者が宿りやがて分離してゆく「主体の亀裂の実在化」であり、この分裂状態こそが文学を初めとする芸術創造の源泉だとの見方である。

これに対し Simone de Beauvoir (1908-86) は「雌の機能だけでは女性を定義し尽せない」と述べ、男より愚

劣な「第二の性」を強いられるジェンダーとしての「女」が、芸術創造の可能性を狭めることを指摘していた。

世代を異にするフランス女性思想家を、「語る主体の性」が貫いている。クリステヴァが提起した「記号としての女性性」もまた、性的同一性の解体を通じての、生物学的条件の超越を意図するものと言えた。にも拘らず彼女が一方では「雌」の機能を文学創造に重ね合わせることに、大きな矛盾を見出すのである。

クリステヴァの女性思想は、時代・国境・学問領域を軽快に跳び越えながら、西欧文化の深層に葬られた「母」を呼び醒ませようとする壮大な探究であった。しかしながら彼女が女性解放を託すのは、言わば究極的な「他者性」の体現としての「母」に他ならず、その称揚が重大な危険性を孕むことも否めないのである。盲目的な母性礼讃に陥ることなく「母」の考察を解放に結びつける試みこそ、現代女性思想を読み解く鍵となるであろう。

